



和宮と笠置シヅ子ー 歴史教科書とジェンダー

長野県蘇南高等学校長 小川 幸司

2022年度から全国の高校生が新科目「歴史総合」を学び始めている。新しい学習指導要領では、世界史にかかわって「歴史総合」が高校の地理歴史科の新しい必修科目になったからである。

18世紀以降の近現代史を学ぶ「歴史総合」は、明治維新以来の日本の後期中等教育史上初めて、日本史と世界史を統合的に学習する歴史科目である。たとえば、アメリカ独立革命やフランス革命と明治維新を比較しながら学ぶことになるし、戦間期の欧米で展開された大衆デモクラシーと日本の大正デモクラシーの光と影を同時代的に考察する。

また、「歴史総合」では、これまでの歴史学習が用語の暗記に終始しがちであったことを反省し、教授内容重視（コンテンツ・ベース）から歴史学習によって育む資質・能力の重視（コンピテンシー・ベース）に転換することが目指されている。そのため、教科書のあちこちに、歴史をめぐる問いや、考察の素材となる資料が示されるようになった。

そこで本稿の謎めいたタイトルが問題となる。実は、「和宮と笠置シヅ子」というのは、今年度の「歴史総合」の中で最も多く採択されている某社の教科書に記述された、日本史部分の女性の人物名のすべてである。より正確に言えば、巻末の索引に登場する日本の女性が二人だけなのであり、しかも笠置シヅ子は索引の「東京ブギウギ」を私が置き換えてカウントしたにすぎない。では、世界史部分の女性はどうと、西太后、ヴィクトリア女王、サッチャー、アウン・サン・スー・

チーなど、政治に深くかかわった人々がそれなりには登場している。いずれにせよ索引の1458個の歴史用語のなかで、女性やジェンダーの歴史にかかわる歴史用語は、わずか15個（1.02%！）にすぎなかった。すぐに補足しておきたいが、この教科書は優れた記述内容であり、女性参政権の獲得の歩みであるとか、大衆文化と良妻賢母親念の広がりなど、ジェンダー史を考える記述を従来の教科書よりは丁寧にしようと試みている。写真にのみ、市川房枝も登場する。そして日本史の具体的な女性が登場することの少なさは、他の教科書にも（平塚らいてう、金子文子、緒方貞子のように若干増えるとはいえ）共通している。

そのうえで、「歴史総合」の教科書に登場する日本の女性が、和宮と笠置シヅ子など数名にとどまっている現状に、私は大きな課題意識をもちたい。ジェンダー史の記述が社会の制度や通念の分析になるがゆえに、人物の数だけが問題ではないことを十分認識しつつ、女性の行為主体性を具体的な人物を通して学ぶことや、男らしさなどを含めジェンダーそのものを歴史的に考えることが、もっとあるべきだと思うのである。私自身は信州の小さな高校で校長を務めており、生徒たちがごく普通にジェンダー不平等に問題関心をもち、校内の設備や校則がSOGIにそって公正なのかを教師に問いかけてくる日々を過ごしている。そのような時代にふさわしいジェンダー視点をもった歴史教科書をつくるために、さらに私たちは努力していくべきではないだろうか。

事業報告

東海ジェンダー研究所 25 周年記念国際講演会 2022

ジェンダード・イノベーション

社会的公平と環境の持続可能性をめざして、科学と技術の卓越性を創出しよう



9月10日(土)東海ジェンダー研究所25周年記念講演会が名古屋国際センター別棟ホールで開催され、会場とオンライン併せて140名余りの参加があった。ロンダ・シービンガー教授(以下S教授)のジェンダード・イノベーション(以下GI)に関する講演を第1部とし、休憩をはさんで第2部では、それに関連する人文系のテーマや日本の身近な事例をもって、先のS教授の講演に対する理解を深めようという趣向であった。

当初S教授の講演会は25周年記念行事とは関係なく、2020年の夏の開催を予定して、あらゆる面から準備を整えた挙句にコロナの流行で中止となった。翌2021年の国際講演会は見送り、弁護士小林陽子先生のご講演(本誌No. 74)を対面とリモートで開催し、講演後には動画の配信も行っただけの機会となった。そうしたコロナ時代のイベント手法も経験して迎えた2022年であった。9月初旬にお茶の水女子大学、日本学術会議、そして東海ジェンダー研究所の3か所でそれぞれの聴衆のニーズに合わせてS教授の講演会が組まれた。しかし来日は難しく、講演はZoom開催となった。専門外の人にも科学技術分野におけるジェンダー分析の必要がよく理解できる内容だったし、活発な質疑応答の時間が持ててS教授もとても喜んでくれた。

この第1部に加えて25周年の記念行事をより一層盛り上げてくれたのが第2部で登壇された2人のパネリストであった。科学史研究者の鶴田想人さんは、S教授が夫のブロクター教授と共に創案したアグノトロジー(無知学)という興味深い概念の研究者でもある。そこで、S教授の歴史研究を踏まえつつ無知学の視点から時に笑いも交えて、GIを分かり易く分析し、GIが最終的には社会的正義につながるものであることを論じて下さった。S教授も



シンポジウムパネリストの弓削尚子さん(左)と鶴田想人さん(中央)、コーディネーターの小川理事(右)

そこまでは思い至っていないのではないかと
思わせる見事な説明だった。続く西洋史学の弓削尚子さんのお話も絶妙で、女声によるサービ



ス機器であるアレクサ(女性名)に始まりトイレの音姫、音のさま(お殿さま)と、会場を沸かせて下さった。GIの音声面での議論に加え、節水としての有効性も展開して聴衆を魅了した。会場との質疑応答も楽しく、瞬間の1時間45分であった。

コロナに翻弄され長い紆余曲折を経ての開催であったが、皆様の絶大なるご支援のもとに25周年記念講演会を無事終了できて感謝するばかりである。次なる30周年には、講演会に加えて、和やかな懇親会もぜひ実現したいものである。

小川 眞里子(東海ジェンダー研究所理事)
(講演内容は『ジェンダー研究』25号に掲載予定)

参加者のアンケートから

基調講演・シンポジウムともに、具体例が多く、わかりやすかったです。「無知学」という言葉をはじめて知り、日本も要注意と思いました。

SDGsが企業の新しい方向性として普及しています。その主点はイノベーションですが、どのようなイノベーションがされるのかには疑問がありました。今日ジェンダード・イノベーションのお話を聴いて、市民からも声を上げていくことの重要性を具体的に知る事ができました。

ジェンダード・イノベーションは「ハイ・エンド」と考えられがちであった(ある)が、生理用カップの配付等により、多様性に貢献できると学んだ。SDGsとの関連性も理解できた。改めて、ジェンダーステレオタイプを補強しないこと、no genderが目標ではなく、違いがあっても平等に評価することが必要なのだと理解した。

個人助成受託者報告会



7月16日(土)、標記報告会が本研究所セミナー室で開催されました。コロナ感染者の急増で第7波の到来が確実視される中、報告者も参加者もオンラインと会場の両方で行いました。ハイブリッド開催は今年で3回目となり、TeamsからZoomへの移行、機材の充実、前日の入念なリハーサルをもって臨んだ報告会でしたが、予期せぬ不具合が生じ、ハウリングがひどかった第1報告者には気の毒なことをしました。会の進行中に調整し、第2報告者からはまずまずの視聴環境となりました。第1報告者には全体討論の時間を使って、議論を深めていただくことができたのは幸いでした。

本年は昨年の報告予定者の繰り延べ参加2名を含む、合計6名の報告で、12時半から短い休憩を挟んで4時間半の長丁場となりました。報告会終了後の懇親会は、今年も叶いませんでした。限られた時間でしたが、個々の発表について活発な意見交換が行われ、終了後も報告者相互で、また報告者と来場者との間で熱心な議論が続いたことに、大きな手応えを感じました。

さて、**第1報告者、大畑 凛さんの「森崎和江における1960年前後の女性運動論について」**は、コロナにより資料調査が十分にできず、研究計画を若干変更して研究成果を発表して下さったものです。それにもかかわらず「非所有の所有」の概念的意義など、とても興味深い内容で、論文を読ませていただくのが楽しみな研究でした。

第2報告者、福永玄弥さんの「植民地権力とセクシュアリティの近代—日本植民統治期の朝鮮と台湾における「同性愛者」の誕生—は、明快な語り口で視聴者を納得させるものでした。同性愛、性欲学、変態性欲などといった字面を目にすると、聞く方は構えてしまうのですが、十分に整理され論理立てられた議論は嫌悪感とは無縁でした。東アジアにおける「同性愛者」の理解の変遷は明快に示されたので、後は発表者自身がおっしゃる通り、植民地政策との関連が考察されることを大いに期待したいと思います。

第3報告者、山田安珠さんの「三歳未満児保育の拡大はどのように実現されたのか—西ドイツ二都市の比較事例研究—」は、コロナ禍のこの時期にドイツから一時帰国された貴重な一日を会場において下さったの発表でした。保育の問題は、東海ジェンダー研究所でも長く取り組んできた課題ですが、これまであまり情報

がなかったドイツ事情は興味深いものでした。とりわけ子ども自身の「保育の権利」を謳った法律KiföG (Kinderförderungsgesetz) による2008年以降の変化は、わが国に該当する法律がないこともあって、対照的な2地域の比較と共に、国際的な比較の面からも新鮮でした。質疑では、比較する2都市の背景をさらに掘り下げて欲しいという注文も出ました。

第4報告者、平安名萌恵さんの「シングルマザーの選択とジェンダー—沖縄におけるフィールドワーク調査から—」は、地縁、血縁によってシングルマザーが比較的守られてきたように語られる従来の沖縄研究に一石を投げようとする、野心的な研究課題でした。著者が苦労された参与観察調査は15名にも上るのですが、今回は2名の分析結果が示されました。データは個別レベルで、一般化して論じるには、残りの参与観察調査の分析が待たれるところです。家族社会学という視点から、沖縄社会の家族主義の限界が明確化されることを期待したいと思います。

第5報告者、陳環(ちん けい)さんの「近代日本画塾からみる女子美術教育と女性画家の進出と絵画表現」も、従来あまり語られてこなかった女子美術教育に取り組んだ意欲的研究です。科学や医学などと異なり、学校教育とは別に画塾というルートがあり、そこで形成される人脈など特異な面も多々存在する分野ということで、概要が明らかにされることが待ち望まれます。

最後の奥山裕介さんの「北欧リアリズム文学における「センチメンタル」な叙述と同時代的セクシュアリティ規範の関係」は、北欧文学にける情熱が感じられる発表でした。北欧とくにデンマーク文学ということで、冒頭で言及されたアンデルセン以外を知る人は少ないでしょう。デンマークの作家J・P・ヤコブセンとヘアマン・バングがセクシュアリティ規範との関係で考察されました。ヤコブセンの主要作品『ニルス・リューネ』を既に翻訳刊行している報告者の語り口は滑らかで聞き手を魅了しました。質疑で、同じく北欧(ノルウェー)のイブセンへと話が及び、議論が佳境に入ったところで時間が足りなく残念でした。ぜひ成果を文字にして読ませて下さることを願っています。

以上、充実した報告会になったことを感謝いたします。

小川 眞里子(東海ジェンダー研究所理事)

INFORMATION

事業報告

■ 2022年度 研究助成受託者の決定

個人助成 4名(応募総数32名)

武内 今日子 (東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程)	2000年代日本におけるXジェンダー／ノンバイナリー概念の受容史
重松 美有紀 (淑徳巣鴨高等学校非常勤講師)	19世紀半ばのフランス公教育における知とジェンダーの関係の再検討 —— ジョゼフィーヌ・バシュルリーの教育思想と実践を中心に ——
石黒 安里 (同志社大学アメリカ研究所専任研究員・助教(有期))	ユダヤ教とLGBTQ:現代アメリカ社会における挑戦
齋藤 葵 (ノースウエスタン大学歴史学部後期博士課程)	1920年代から1960年代の遊郭、赤線、また歓楽街の女性から見る 日本の福祉についての研究

団体助成 3団体(応募総数3団体)

女子教育研究会	ジェンダーをはじめとする阻害要因を、学校内、家庭内、社会を問わず研究する。 女子教育の現場にある者が日常の指導に活かすことが出来る知見を学ぶ。
学術環境研究会	キャンパス・セクハラ法整備に向けての問題分析： 法・政治理論枠組みの構築に向けて
「労働と再生産の再考」研究会	社会的・空間的(周縁)に関するジェンダー・ポリティクスの共同研究 —労働と再生産をめぐる表象分析とケア理論の検討を通して—

お知らせ

藤岡伸子さんご逝去

藤岡伸子さん(名古屋工業大学名誉教授)が2022年7月11日にご逝去されました。
2020年6月から2022年6月まで当研究所の評議員・機関誌編集委員・年報審査委員として、多大なご尽力を賜りました。
ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

受賞おめでとうございます

当研究所の理事、小川眞里子さん(三重大学名誉教授・三重県男女共同参画審議会委員)が令和4年度「男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰」を受賞されました。
小川さんは、三重県女性センター開館や三重県男女共同参画推進条例の制定に向けて尽力し、令和2年度までの6年間は県男女共同参画審議会会長として、県男女共同参画基本計画改定・策定の中心的役割を担い、県施策の礎の構築、発展に大きく寄与されました。
受賞おめでとうございます。

2022年度

賛助会員のつどい(公開)

日程:2023年1月21日(土)13:30
講師:青木千賀子さん
(元日本大学大学院国際関係研究科教授)
会場:名古屋都市センター
テーマ:社会を動かす「開発とジェンダー」
～ネパールのダリット女性たちの活動から～
詳細が決まりましたら、チラシやホームページでお知らせします。

賛助会員を募集しています。

賛助会費 年間 一口 1,000円

振込先 郵便振替口座 00820-0-77338
公益財団法人東海ジェンダー研究所
(振込手数料は当方負担ですが、2022年1月より、現金での振込には別途手数料がかかります。)

他行からお振込みの場合

銀行名 ゆうちょ銀行
店名 〇八九
預金種目 当座
口座番号 0077338
(振込手数料はご負担ください)

* 会員の皆様には当研究所の年報『ジェンダー研究』やニュースレター『LIBRA』、講演会などの事業のご案内をお送りします。
* 当研究所は公益財団法人の認定を受けており、会費及び寄付については税法上の優遇措置があります。

編集後記

新しい「歴史総合」の教科書に女性がほとんど登場しないという、まるで時代に逆行するような現状を初めて知りました。新しい時代にふさわしい教科書づくりにともに進んでいきたいと思います。国際講演会には、多くの方々にご参加いただきありがとうございました。

LIBRA

公益財団法人 東海ジェンダー研究所

〒460-0022 名古屋市中区金山1-9-19 ミズビル6F

T E L 052-324-6591 F A X 052-324-6592

E-mail info@libra.or.jp https://www.libra.or.jp/